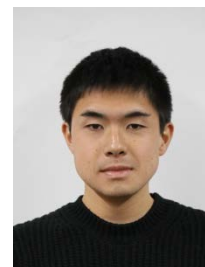


ランニングを通じた裾野市の活性化について

～ランニング×地域づくりの考察～

静岡県裾野市 安倍 健



1. はじめに

(1) ランニングとの出会い

大学2年生の春、私はランニングというスポーツに出会った。きっかけは、在籍していた大学で「フルマラソンを走る」科目を受講したことである。走ることはそれほど好きではなかったが、その年の初めに地元の隣近所の人たちと駅伝大会に出場したことが楽しく、「フルマラソンも意外と面白いのでは」と思い、この科目を受講した。苦しいだけだと思っていたランニングは、大学の友人や先輩たちと一緒に走ればとても楽しく、瞬間に「趣味＝ランニング」となった。その年の秋に迎えた初のフルマラソンでは、沿道の声援や給水所のボランティアスタッフのおもてなしが励みになった。今までにないほど「頑張れ」「おめでとう」「ありがとう」という声援を受け、大きな充実感と達成感を得た。

以来、「地道な努力や準備が成果となる」ランニングに魅力を感じ、さらに走り込んだ。初フルマラソンから1年後、目標の3時間切りを達成し、それからも「楽しみながら自己ベストを更新したい」と思い、走り続けた。

(2) ドイツ留学で感じたランニングの可能性

大学4年生のドイツ留学中、私はフルマラソン、ウルトラマラソンを含め年間で9本の大会に出場した。異国の地であっても、沿道の声援やランナー同士の励まし合い、選手へのおもてなし精神は、日本と同様とても温かかった。中でも印象的な出来事が、駅から会場まで走るバスが2時間に1本という田舎の大会に出場した時のことである。フルマラソンを走り終わった後、駅までの帰路に困っていると、「駅まで送ってやるよ」とボランティアスタッフの方が送迎してくれた。車中、その方は「田舎の大会は小規模で寂しいけど、ランナーと地元スタッフが「家族」のような一体感を持って楽しめるんだ。」と生き活きと話していた。様々な地域から来た多くのランナーが、街中を楽しみながら走る様子は、地元の人たちにとってうれしいことなのだ、と実感した出来事であった。

(3) テーマの提起

環境の変化や怪我による長期離脱を経験しながら、現在もランニングを続けている。これまでのランニング人生を振り返って思うことは、ランニングを通じて人々が元気になり、人生をより前向きに送れるのではないかと、ということである。

静岡県裾野市は、スポーツによるまちづくりを推進しており、その中でランニングを活用すれば、裾野市をもっと元気なまちにできるのではないかと考える。

本レポートでは、「ランニングを通じて人々が元気になり、地域を活性化させる」をテーマに、日本におけるランニングブームやスポーツ行政におけるランニングの動向を振り

返り、これまでの取組で見えてきた課題を整理して、裾野市を活性化させるランニング文化について考察していく。

2. 日本におけるランニングの位置付け

(1) ランニングの形

まず、本レポートにおけるランニングの概念について整理する。競技としてのランニングでは、「長距離走」「マラソン」「駅伝」がある。「長距離走」「マラソン」は一人で長い距離を走る競技に対して、「駅伝」はチームでタスキをつないで距離を走る競技である。マラソンにも距離に応じて様々な種類があり、42.195km を走る「フルマラソン」、フルマラソンの半分の距離を走る「ハーフマラソン」、フルマラソンよりも長い距離を走る「ウルトラマラソン」などがある。また、山の中を走る「トレイルランニング」や、マラソンとピクニックを掛け合わせた「マラニック」など、ランニングの形は多種多様である。本レポートで取り上げるランニングには、このような様々な形を内包している。

(2) ランニングブームの到来

2007 年に始まった「東京マラソン」がきっかけとなり、日本にランニングブームが起こった。制限時間が 7 時間と初心者でも完走しやすいこと、首都東京をたくさんの沿道の応援を受けながら走れることなどが要因となり、完走を目指す市民ランナーが年々増加した。特に女性ランナーの増加を促し、「美ジョガー」という言葉が出るなど、マラソンが女性にとっても親しみやすいものという印象を与えた。



写真 1 東京マラソン 2023
(東京マラソン HP より)

平日夜の皇居周辺が仕事を終えた多くのランナーであふれたり、女性誌にマラソン特集が組まれたりしている事例は、ランニングが現代社会に定着している印象を与えている。

(3) ランニングがもたらす効果

ランニングが健康づくりの手段として選ばれることから健康に良いスポーツだという印象だが、近年の研究によって、ランニングが快適気分と認知機能を高めることが明らかとなった。脳においてもランニングは良い効果をもたらすのである。

ランニングが社会経済に与える影響も大きい。女性ランナーが増加したことをきっかけに、ファッションや趣味、生活などに関わる女性誌にランニングに関する記事が見られるようになった。走るために必要なモノやサービスが続々と提供されるようになった。2022 年度の市民マラソンの経済効果は約 3,968 億円と試算されており、マラソンは地域活性化に大いに貢献していることがうかがえる。

3. 静岡県裾野市におけるランニングの動向

(1) 静岡県におけるランニングの動向

静岡県において過去 1 年間にテレビで観戦したスポーツ種目では、「マラソン・駅伝」が最も高い割合を記録し、全国平均と比較すると約 12% 上回る結果となっている。

静岡県			全国平均		
1位	マラソン・駅伝	61.30%	1位	プロ野球：NPB	63.10%
2位	Jリーグ	60.87%	2位	高校野球	52.86%
3位	プロ野球：NPB	55.65%	3位	Jリーグ	50.72%
4位	高校野球	52.61%	4位	マラソン・駅伝	49.43%
5位	サッカー日本代表試合 (五輪代表含む)	41.74%	5位	サッカー日本代表試合 (五輪代表含む)	42.30%

表 1 過去 1 年間にテレビ観戦したスポーツ種目
(笹川スポーツ財団 HP より)

また、静岡県では毎年 12 月初旬に市町対抗の駅伝大会である「静岡県市町対抗駅伝競走大会」が開催される。小学生、中学生、高校生、一般、40 歳以上までの全 12 区間でタスキをつなぐこの大会は、県内各市町の活性化及び市町相互のさらなる交流の促進、県民意識の高揚、県民スポーツの振興等を目的としている。この大会は 2023 年で第 24 回を迎え、静岡県の 12 月の風物詩になりつつある。

(2) 裾野市におけるスポーツ行政の概要

裾野市は静岡県の東部、富士山の麓に広がり、豊かな自然に囲まれたまちである。東名裾野 I.C から東京 I.C まで約 70 分と首都圏までアクセスが良好な地理的環境にある。人口は 49,284 人 (2023 年 12 月 1 日現在)、面積は 138.12 km²、標高は 78.5m から 2,169m と起伏に富んだ地形を有する。

スポーツを巡っては、国や県のスポーツ行政の動向を踏まえ、2016 年 3 月に「裾野市スポーツ推進計画」を策定し、スポーツ推進体制の方向性を示した。2018 年 3 月には、裾野市スポーツツーリズム推進協議会 (以下、S-SP0 という。) を設立し、官民連携でスポーツツーリズム事業に取り組む体制を整備した。さらに、「第 2 期裾野市スポーツ推進計画」(2021 年 3 月改定) では、「市民一人一人がスポーツに親しむことができる環境づくり」と「市民スポーツの振興と交流人口・関係人口の拡大」の 2 つの基本構想を掲げ、「生涯スポーツの推進」「スポーツ関連施設の整備・充実」「スポーツツーリズムの推進」の 3 つの課題を設定した。ここで挙げられた「スポーツツーリズムの推進」の中心事業が、陸上長距離をターゲットにしたスポーツ合宿誘致である。

(3) スポーツツーリズムとしてのランニング

裾野市では 2017 年から「準高地トレーニングができるまち」としてスポーツツーリズム事業を推進している (図 1)。富士山麓の豊かな自然環境、標高の高さ (準高地)、首都圏からのアクセスといった地域資源を活かして、陸上長距離をターゲットにしたスポーツ合宿誘致を足掛かりに、交流人口拡大や地域経済活性化に取り組んでいる。

市内や近隣市町にあるクロスカントリーコース、トラック (競技場)、ロード (道路)

を活用して、合宿に来た長距離陸上部へ練習場所を提供している。また、市内のペンション、旅館、ビジネスホテル、研修所の協力を得て、事務局（市産業観光スポーツ課）が合宿チームと宿泊施設との間で合宿を調整している。

S-SPO では、スポーツ合宿の地としての認知度向上と他スポーツ合宿先進地との差別化を図るため、「スポーツ×医科学」や「スポーツ×食」をテーマにした大学連携の取組や、地元の飲食店・民間事業者などを巻き込んだ取組などを行っている。

<概要> 計画期間：～令和 7 年 3 月 31 日

〈現状・課題〉

- ・富士山麓のスポーツ合宿の地としての認知度向上及び他地域との**差別化が必要**。
- ・スポーツ合宿の経済波及効果を拡大させるため、**宿泊業だけでなく、他業種も含めた仕組みづくりが課題**。
- ・陸上以外の合宿誘致、富士山麓や箱根の自然環境を生かしたアウトドアスポーツへの展開といった**多角化が必要**。

〈総合的な取組内容〉
 第5次裾野市総合計画「地域資源を活用した魅力あふれるまち」
 ～地域が潤う観光まちづくりの推進！！～

【具体的事業】

■ **裾野式「準高地トレーニング」合宿誘致の推進**

裾野式①**医科学**：準高地のトレーニング効果を**医科学的に検証した実証実験データを活用**したスポーツ合宿誘致を推進。

裾野式②**アプリ**：準高地トレーニングアプリ「**S-SPO**」の提供

裾野式③**アスリート飯**：大学×実業団と共同で「**すその頂飯**」を開発。市内飲食店等にて提供。食事面からもサポート！

裾野式④「**S-Station**」：スポーツ愛好家立ち寄りスポット設置

■ **アウトドアスポーツへの展開**

富士山・箱根の自然環境を生かしたトレラン、トレッキング、サイクリング等を活用した更なる誘致・誘客を図る。

図 1 裾野市スポーツツーリズム推進協議会の取組概要
 （裾野市スポーツツーリズム推進協議会 HP より）

「スポーツ×医科学」をテーマにした取組では、静岡大学・順天堂大学・仙台大学・日本大学・東洋大学で結成されたプロジェクトチームにより、準高地トレーニングを実施したアスリートの身体への影響を、医科学的見地から検証する実証実験を実施した。

「スポーツ×食」をテーマにした取組では、「すその頂飯（いただきめし）プロジェクト」を実施した。この取組では、日本大学短期大学部食物栄養学科の教授や学生、実業団所属の管理栄養士と連携して、地場産品を取り入れながら長距離アスリートに配慮した食事メニューを共同開発した。また、市内宿泊施設や飲食店等を対象にスポーツ栄養学講座を開催し、講座の知識を基に参加者がオリジナルメニューを考案した。スポーツ栄養学講座は現在も行われており、市内飲食事業者や地域住民への普及を図っている。

S-SPO は、宿泊施設や飲食店、公共施設等を対象に、ランナー等のスポーツ愛好家が気軽に立ち寄れるスポット「S-station」を募集している。市内事業者がスポーツ愛好家に特典を提供することで、市全体に経済波及効果を広げることが目的である。加えて、スポーツ愛好家が外出先でも手軽にトレーニング環境や「S-station」の位置情報等を確認できるように、準高地トレーニングアプリ「S-SPO」を開発して提供している。

（4）生涯スポーツとしてのランニング

裾野市は、先述した静岡県市町対抗駅伝競走大会で入賞を目標に、5月中旬頃から月に1～2回の頻度で合同強化練習会を開催している。代表チーム入りを目指す小中学生から一

般・40歳以上のランナーが参加し、年齢・男女を問わず様々なランナーが練習に励んでいる。監督・コーチの指導やスタッフの支援も手厚く、練習会などで選手たちをサポートしている。監督・コーチ・スタッフ、そして選手たちの努力の成果もあり、現在まで6年連続上位入賞を達成している。

このほか、小学生から壮年（30歳以上）まで幅広い地域住民がチームを組んでタスキをつなぎ市内を走る「裾野市駅伝大会」や、深良地区と呼ばれる小学校区を走る「深良地区元旦マラソン・駅伝大会」など、地域住民がランニングに参加する大会が開催されている。

4. 裾野市におけるランニングに関わる事業の課題

（課題1）地域住民のランニングへの関心が低い

前章で取り上げたような陸上長距離チームの合宿誘致や医科学・食における大学連携、ランナーへのおもてなしを図る地域連携、陸上長距離選手の育成、駅伝大会の開催は、事業相互の連関が希薄になっている。この原因が「地域住民のランニングへの関心度の低さ」にあると考える。

有名な陸上長距離選手やチームが合宿に来て、宿泊施設や練習施設との関わりだけで、そこに地域住民が関わる機会が少ないため、「陸上長距離合宿が盛んなまち」という印象を地域住民に訴求できていない。

ランニングの普及につながる「準高地トレーニング実証実験」や「すその頂飯」といった大学連携の取組も、地域住民の関わりが少ないため、関心度は低くなってしまふ。S-stationも、ランナー等のスポーツ愛好家へのおもてなし雰囲気醸成させるほど地域住民に定着していない。

市内で毎年開催される駅伝大会も、その一時だけは盛り上がるが、普段からランニングをする習慣が定着せず、陸上長距離合宿が盛んでも他人事のように捉えてしまうため、市全体としてランニングへの盛り上がりには欠けている印象がある。

陸上長距離界にとって裾野市が合宿の聖地であること、ランニングに関する取組が様々な場面で行われていることをより多くの地域住民が認知して関心を持つようになれば、合宿に来たチームへのおもてなし精神の醸成や、ランニングに関する取組への参画を促し、地域住民の活性化につながるのではないかと考える。

（課題2）陸上長距離合宿団体・大学と地域住民との関わりが弱い

地域住民のランニングへの関心度の低さの原因となっている要素が、合宿を行う陸上長距離合宿団体やランニングに関わる活動に取り組む大学と地域住民との関わり方の弱さである。特に次代の社会を担う人材である大学生を地域づくりに参画させるのに、地域住民との関係性構築は必須である。大学生が主体となって取り組む活動を地域住民が支えることで、大学生の地域への参画につながるのではないかと考える。

（課題3）継続的な市の事業運営が難しい

現在、スポーツツーリズム事業を行うS-SP0は行政や観光協会、スポーツ協会、商工会、旅館・ホテル業、運輸・旅行事業者、スポーツ施設管理者といったスポーツツーリズム

ムに携わる市内関係事業者を会員とし、年 3～4 回開催される協議会で実施事業を検討・協議している。

しかし、ほとんどの事業は事務局となる行政が提案するものであり、会員は事務局の提案をただ聞いて承認するだけの協議会となってしまう。また、行政が事務局を務めているため、合宿団体と市内関係事業者との連絡調整も行政の役割となってしまう、行政への負担が大きい。さらに、行政だけが事務局を務めると、市長の市政方針や職員人事異動によってその取組への熱量や方針が変わってしまう、継続的な事業運営が困難になる可能性が高い。S-SP0 の運営資金も行政からの交付金・委託料のみの収入であるため、資金確保を行政に依存している状況である。

5. 課題解決に関する先行事例

前章では、(課題 1) 地域住民のランニングへの関心度が低い、(課題 2) 陸上長距離合宿団体・大学と地域住民との関わりが弱い、(課題 3) 継続的な市の事業運営が難しい、という 3 つの課題を提示した。本章では、このような 3 つの課題を克服する可能性のある先行事例について紹介する。

I 筑波大学における自由科目：つくばマラソンの開講

(課題 1) と (課題 2) に対応する事例が、筑波大学で開講されている自由科目「つくばマラソン」である。私はこの科目を大学 2 年生の時に受講し、その効果を実感した。

つくばマラソンは、筑波大学をメイン会場として開催される大会であり、大学が主催者の一員として運営に携わっている。第 12 回大会 (1992 年) から、筑波大学でフルマラソンへの参加を目標とする科目「つくばマラソン」が開講した。

自由科目「つくばマラソン」は講義とトレーニング、そして大会への参加を通して、目標達成へのプロセスの意義、生涯スポーツとしてのマラソンの価値と可能性の学びをねらいとしている。担当教員である筑波大学の鍋倉賢治教授は、「フルマラソンを走って 1 単位」という過酷な授業を受講する学生の数に当初不安はあった、と述べている。しかしコロナ禍を経てなお、自由科目「つくばマラソン」を多くの現役学生たちが受講している。

現在では、自由科目「つくばマラソン」をステップアップさせ、地域住民を対象としたマラソン講座 (クラブ) も開講している。このクラブでは、つくば市、茨城県を中心とした近県各地から、肩書きも属性も異なる老若男女が集まり、マラソンに一から取り組んでいる。また、筑波大学の教職員や学生、自由科目「つくばマラソン」を履修した OB・OG が数多く関わっている。参加学生は、自分より年上の先輩方の真摯で前向きな取組を目の当たりにし、強い衝撃を受ける。一方、一般の参加者は、若い学生に対して、自らの経験や生きる知恵を伝えることに、喜びを見出している。

大学の外側でのこのような地域住民との交流は、学生と地域住民に活力をもたらす重要



写真 2 つくばマラソン受講生
(筆者撮影)

な要素である。このような関係性の構築がやがて、「まちの愛着」へとつながり、「またこのまちで走りたい」と戻ってくるランナーが増えるきっかけになるはずだ。

II 高知大学地域協働学部の地域活動

同じく（課題 1）と（課題 2）に対応する事例として、現地調査で訪問した高知県南国市稲生地区における高知大学地域協働学部（2015 年新設）の取組を取り上げる。

4 年間のカリキュラムの中で稲生地区を実習地として選択した学生は、地域コミュニティの再構築に取り組む集落活動支援センター「チーム稲生」とともに、住民同士のつながりを深めるサロン活動や「びわも祭り」、「健幸感謝菜」等の活動に企画の段階から参画する。また、チーム稲生と共同で地域情報誌「いなぶっく」の発行にも取り組み、住民や学生の活動、住民へのインタビュー記事など稲生地区にまつわる様々な情報を掲載し、住民同士のコミュニ



写真 3 高知県南国市での現地調査
(地域活性化センター事務局撮影)



写真 4 地域情報誌「いなぶっく」
(チーム稲生 Facebook より)

ケーションや住民・学生が地域を知るきっかけを創出している。高知大学の玉里恵美子教授は、「学生だけでなく、地域住民も学ぶ姿勢が大事。「来てくれてうれしい」だけでは終わらせない地域づくりを目指したい。」と述べていた。地域住民が地域の実情について学び、地域の将来について考えることで、地域への愛着が醸成され、学生が卒業しても継続して地域活動を実施できるそうだ。

裾野市でも、静岡大学や日本大学短期大学部食物栄養学科と連携してランニングに関する活動を行い、行政と大学との連携は強い。しかし大学と地域との連携は弱く、大学の活動を地域住民に発信する情報媒体も少ない。稲生地区における高知大学地域協働学部の活動は、大学と地域との関係性の構築や地域住民への情報発信という面で参考となる。

III 観光地域づくりプラットフォーム（一社）そらの郷の運営体制

（課題 3）に対応する事例が、現地調査で訪問した徳島県三好市で活動する観光地域づくりプラットフォーム（一社）そらの郷の運営体制である。

徳島県三好市・美馬市・東みよし市・つるぎ市の 2 市 2 町で構成されるにし阿波～剣山・吉野川観光圏では、観光産業を活用して「住んでよし、訪れてよし」の観

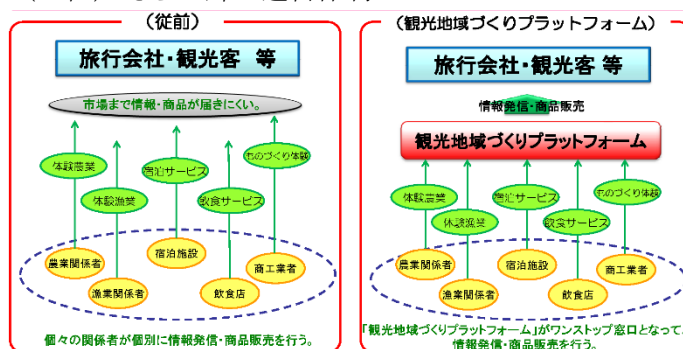


図 2 観光地域づくりプラットフォームのイメージ
(観光庁 HP より)

光地域づくりを目指している。(一社)そらの郷は、観光地域づくりプラットフォームとして設立され、旅行商品の企画・開発・販売や、外国人観光客の誘客、体験型教育旅行受入窓口等を行う。

現地調査で感じたことは、様々な団体から構成される(一社)そらの郷が事務局となり、行政・観光関係団体・商工団体・交通事業者等の間に入り、観光地域づくりや教育旅行の企画等を行うことで、地域住民も旅行者も Win-Win な関係になるということである。行政など一つの組織が事務局を担うのではなく、多種多様な組織から役員を選出して事務局を構成し、地域住民と旅行者の間で調整を行うこの仕組みは、S-SP0 の継続的な運営体制の構築に活かせると考える。

6. ランニングを通じた市の事業の改善策

前章の各地の取組を参考にして、本章では表 2 に示すように、ランニングを通じた裾野市の活性化について提案する。

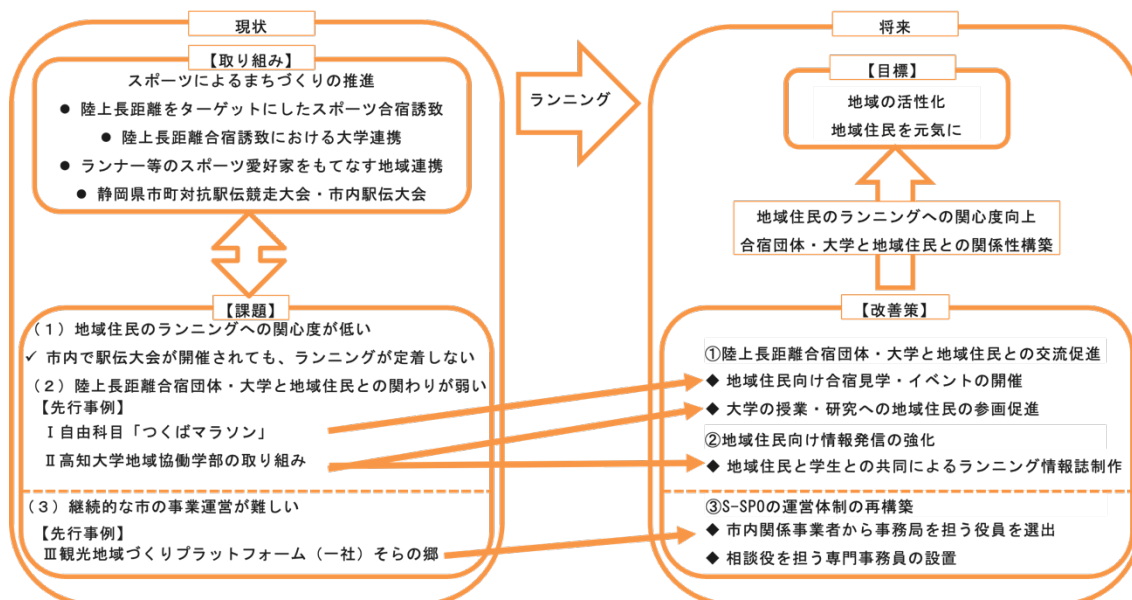


表 2 ランニングを通じた裾野市の活性化について (筆者作成)

①陸上長距離合宿団体・大学と地域住民との交流促進

I やIIの先行事例を取り入れる改善策が、陸上長距離合宿団体や大学と地域住民との交流の促進である。

陸上長距離合宿チームの承諾を経て、地域住民向けの合宿見学やイベントを開催し、チームと地域住民との交流を図ることで、陸上長距離や合宿チームに対する地域住民の関心度向上と、陸上長距離チームにおける合宿地への親近感の醸成につながる。チームと地域住民同士で顔が見えてくれば、住民からは「またこのチームに来て欲しい」、チームからは「また裾野市で合宿がしたい」という思いが芽生えるのではないかと。

また、静岡大学をはじめとするプロジェクトチームとの実証実験や、日本大学短期大学食物栄養学科とのすその頂飯プロジェクトでも同様に、地域住民がより参画できるようなプ

プログラムが企画できると、地域住民のランニングへの関心度の向上と、学生の地域への親近感の醸成につながる。

②地域住民向け情報発信の強化

Ⅱの先行事例を取り入れる改善策が地域住民向け情報発信の強化である。

陸上長距離チームの合宿やランニングイベントの様子、大学との連携について、実際に研究に取り組む学生とランニングに興味関心を持つ地域住民と一緒に情報誌を作成できれば、それを読んだ他の地域住民が共感を持ち、ランニングに親しみを持つきっかけになる。

情報誌を制作する学生や地域住民は、自身もランニングに関わる活動を行っている。その上で、合宿に来たチームやイベント企画団体とスタッフ、実験に関わる教授や学生、イベントや実験の参加者、宿泊施設や練習施設の管理者等のランニングに関わる人々へのインタビューや取材を行い、情報誌を発行することで、まだランニングに関心のない地域住民への広報につながる。

③S-SP0 の運営体制の再構築

Ⅲの先行事例を取り入れる改善策が、S-SP0 の運営体制の再構築である。上記で提案した①陸上長距離合宿団体・大学と地域住民との交流促進、②地域住民向け情報発信の強化にあたり、より円滑に事業を実施できるようにするため、表 3 に示すように S-SP0 の運営体制を再構築する、という提案である。

行政だけが事務局を行っている体制を見直し、S-SP0 の会員である市内関係事業者から事務局を担う役員を選出し、事業の分野ごとに事務局内で役割を分担して合宿団体等との調整を行えば、個人の業務負担が減り、行政に依存する事業運営から脱却できる。さらに、各会員から選出された事務局役員の相談役を担う専門事務員を設置すれば、役員同士の良好な関係性の維持と事業の進捗把握につながる。

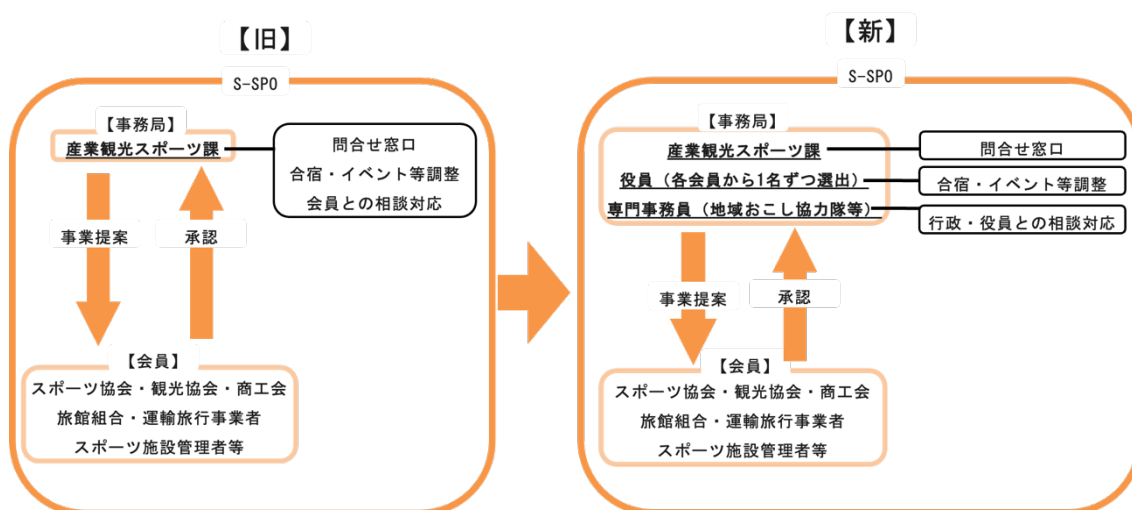


表 3 S-SP0 と事務局の運営体制について (筆者作成)

7. おわりに

これまでのランニング人生を通じて、私はランニングに関わる人たちの笑顔に触れ、そして生きがいを実感してきた。大会で走るランナーや、ランナーを楽しませようと尽力する地域住民の姿を見て、改めてランニングが人々を元気にして地域を活性化させると実感している。

スポーツツーリズム担当であった私は、異動した現在もランニングに関する活動に関わり続けている。今回の提案を、今後のランニングに関する取組に何らかの形で活用し、そして、私の人生を豊かにし続けているランニングを通じて裾野市を元気にしたい。

【参考文献】

- 裾野市スポーツツーリズム推進協議会「裾野市スポーツツーリズム」
<https://www.susonost.com>
- 第 2 期裾野市スポーツ推進計画
- 東京マラソン財団「東京マラソン 2024」<https://www.marathon.tokyo>
- 福田珠己『「自然」は自然なものか？-近年のランニング・ブームに関する一考察-』
経済地理学年報第 60 巻 pp. 301-312 (2014 年)
- 鍋倉賢治『「マラソンの街・つくば」を夢みて』筑波フォーラム第 80 号 pp. 29-32
(2008 年)
- つくばマラソン大会事務局「第 43 回つくばマラソン」<https://www.tsukuba-marathon.com>
- 筑波大学「TSUKUBA JOURNAL」<https://www.tsukuba.ac.jp/journal/>
- 関西大学『KU EXPRESS No. 39』https://www.kansai-u.ac.jp/ja/about/pr/news/2022/10/post_67966.html
- 山西哲郎『ランニング人間論-人はなぜ走るのか-』人間の福祉第 29 号 pp1-12
(2015 年)
- 観光庁 HP「観光地域づくりプラットフォーム」
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/platform.html>
- 笹川スポーツ財団「都道府県の運動・スポーツ実施率別データ：静岡県（2010～2016）」
https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/data/prefecture_1016/shizuoka.html